

太郎の物語の変遷

浜 名 美 紀

目次

はじめに

第一章 浦島物語の変遷

第一節 古代・風土記・浦島子

補足一

第二節 中世・絵巻・うらしま

補足二

第三節 近世・御伽草子・浦島太郎

第四節 近代・森鷗外・玉篋兩浦嶋

第五節 浦島物語の変遷

第二章 「太郎」と英雄性

第一節 色好みと「太郎」

第二節 「太郎」の英雄性

第三節 英雄「太郎」

おわりに

現代の「太郎」

参考文献

はじめに

男子の名の代表とえば「太郎」である。現在の「太郎」のイメージは一般的であり、ありふれている。「〇〇太郎」という名は記入見本でよく使われており、またよく見かける。それは代表ではあるが、決して選ばれたという印象ではない。

だが、時代をさかのぼると「太郎」という名の、選ばれた英雄がいる。昔物語に出てくる「桃太郎」「金太郎」「浦島太郎」などがそうである。

彼らの名の「太郎」は長男を表すものかもしれない。しかしなぜ英雄が「太郎」なのだろうか。

中でも「浦島太郎」は古い時代からの文献が残っているので、古代、中世、近代それぞれの時代の「浦島太郎」を見ることができる。「浦島太郎」はもとほ「太郎」の名が与えられていなかった。それに「太郎」の名が与えられ、また英雄性が伴ってくる。それは英雄視された「太郎」へとつながっていくのである。

文献に残っている「浦島太郎」を中心に「太郎」の物語の変遷を見、そして「太郎」の英雄性について考えたい。

第一章 浦島物語の変遷

第一節 古代・風土記・浦島子

浦島太郎の物語は古い時代から文献が残っている。しかし正確には「浦島太郎」ではない。太郎の名が与えられるのは室町時代からである。それまでの浦島は「浦島の子」であった。

浦島物語の最古の文献は風土記と万葉集の長歌である。「風土記逸文」では「水の江の浦島の子」として浦島は登場する。

爲人、姿容秀美しく、風流なること類なかりき。斯は謂はゆる水の江の浦島の子といふ者なり。

(風土記逸文 丹後國)

浦島に「太郎」の名はなく、また内容も現在知られている「浦島太郎」とは異なる。

嶋子、獨小船に乗りて海中に沈び出でて釣するに、三日三夜を経るも、一つの魚だに得ず、及ち五色の龜を得たり。心に奇異と思ひて船の中に置きて、即て寐るに、忽ち婦人と爲りぬ。

(同書引用)

釣に出た浦島が三日三夜かけて得た五色の龜が女性へと変化するのである。

浦島は龜を助けたわけではなく、釣ただけである。龜を助けることで得るはずである浦島の英雄性は出現しない。故に龜の恩も存在しないのである。そうなると浦島が異郷へ行く直接的な原因は、他の事によらなければならない。その問題は龜から変化した女性自らが示している。

「風流之士、獨蒼海に沈べり。近しく談らはむおもひに勝へず、

風雲の就來つ」

「風流之士」というのは浦島のことである。独りで海に船を浮かべている風流人に女から近づいた、ということから風土記での浦島の英雄性は風流に見出される。そしてここに神仙的な神女と人間である浦島の交流が生まれるのである。

神女は浦島を「蓬山」へ招く。「蓬山」で浦島は神女の父母に会う。

女娘の父母、共に相迎へ、揖みて坐定りき。ここに、人間と仙都との別を稱説き、人と神と偶に會へる嘉びを談議る。

「蓬山」とは現在の「浦島太郎」で言うところの「竜宮城」である。「蓬山」とは仙都であり、女、その両親は神仙である。浦島は

風流の英雄として神仙的な関りを持ったと言えよう。

しかし三年経って急に浦島の心に郷愁が芽生える。

嶋子、舊俗を遺れて仙都に遊ぶこと、即ち三歳に逕りぬ。忽ち土を懐ふ心を起し、獨、二親を戀ふ。故、吟哀繁く發り、嗟歎日に益しき。

人間である浦島が異郷、仙都である「蓬山」に留まるためには神女とのつながりが必要であった。一度は「蓬山」に入ったものの、浦島が俗から脱却できないために郷愁が湧き上がり、「蓬山」を立ち去ることになったと考えられなくもない。仙都「蓬山」の脱出は、浦島の神仙性の脱出、原因となった望郷の念は、仙都「蓬山」と相入れないもの、つまり浦島が俗世から離れきっていない事を意味しているのではないだろうか。

故郷や二親を思うことを俗と一言で言い切ってしまうことはあまり適當ではないかもしれない。言葉を変えれば、それは人間らしさ

と言える。「蓬山」に入ることで浦島は神仙性を手にした。そして「蓬山」を出ることになるのは人間性が現われたからである。人間性が現われたことによって、神仙性は否定される。

「蓬山」を出る際、神女は浦島に玉匣を渡して、決して開けてはいけないという。けれども浦島は三百余年経った地で神女を思い、玉匣を開けてしまう。

ここに、喚子、前の日の期を忘れ、忽に玉匣を開きければ、即ち瞻ざる間に、芳蘭しき體、風雲に率ひて蒼天に翺飛けりき。

浦島は約束を違えたために若さを失い、仙都「蓬山」へも帰れなくなつたのである。

神女の渡した玉匣は、靈性のある神仙女との結合を可能にするタブーの箱、神仙としての浦島の靈性（不老不死）を封じ込めた箱と解釈できる。ならば神女はなぜ、タブーの玉匣を浦島に渡したのだろうか。

浦島にとつての異郷、仙都「蓬山」と浦島をつなぐものは、浦島の靈性を封じ込めた玉匣だつたのではないだろうか。浦島は故郷に帰つてもなお、玉匣を開く前までは神仙性を内在させていた。玉匣はその象徴である。玉匣を開かなければ、浦島は再び神仙性を取り戻すことができた。つまり仙都「蓬山」へと帰ることができたのである。玉匣を開いてしまったことは、浦島の神仙性の完全なる消滅を意味する。浦島は、神仙性を取り戻す最後の望みを、そうとは知らず、自らの手で絶つてしまったのである。

『風土記逸文 丹後國』の「浦島（太郎）」は風流によつて神仙性を得るが、（神仙性と相反するものとしての）俗を捨て切れず、自ら神仙性を絶つてしまうという、悲劇的な英雄であろう。

・第一節の引用は『日本古典文學体系二風土記』（岩波書店）の校注による。原文は万葉仮名である。

補足一

平安時代末から鎌倉時代にかけて、惣領制の家族制度が発達する。大部分の財産や「一族」・「一門」・「家ノ子・郎党」を含む家族的結合の総括権を一子にゆずる傾向から生じ、その子を惣領と呼んだ。惣領は嫡子で長男又は次男以下の器量の者になる。残りの者はすべて庶子となり、財産を少しずつ配与され、惣領の配下におかれた。

古代では妻方の父に主導権があり、妻方の親族との結びつきが強かった。財産分与を女性にも認めた分割相続制と相まって、女性の地位も高かつたのである。しかし惣領制で長男の地位は浮上した。それに伴つて長男「太郎」の地位も上がつてきたと言えるだろう。中世、室町の時代になり、浦島には「太郎」の名が与えられる。これは家族制、文化の変化とも関係があるだろう。特に惣領制度は武士階級に顕著であつた。武士中心の文化の中の浦島は、名も、内容も『風土記』の浦島と異なるものになつていったのである。

第二節 中世・絵巻・うらしま

室町時代になり、浦島には「太郎」の名が与えられた。
うらしま太郎、申けるは、なにともいへ、

（うらしま下（古絵巻）日本民芸協会蔵）
むかし、たんこのくに、うらしまの太郎とて、

(うらしま(室町末絵巻) 同蔵)

古絵巻、室町末絵巻とも、室町時代末期のものだと言われている。古絵巻の方は上巻が失われているので、浦島の様子、亀とのことなどはわからない。しかし室町末絵巻は完全本であるので浦島の様子などがわかる。

むかしたんこのくに、うらしまの太郎とて、あさゆふつりをして、せいろを、いとなみけるか、
(室町末絵巻)

『風土記』と違い、浦島の位は高くない。毎日釣りをして生計をたてている者であり、風流人ではないのである。その浦島は『風土記』と同じように亀を釣るが、

かめは、まんねんのよわひを、へぬもの、をもひしれとて、はなしける
(室町末絵巻)

と、亀を放してやる。ここに、亀の恩の出現が予測される。

翌日、また浦島が海に出ると、小さな舟が一艘見えた。その舟には一人の女が乗っており、都の者だと名乗る。船が難破して自分だけが助かったこと、故郷へ戻りたいことなどを浦島に告げる。浦島は彼女を送るために同じ舟に乗るが、舟は浦島と女を乗せて、黄金の浜へ着く。

みつからは、きのふ、ゑしまかいそにて、つられまいらせし、
かめにて仆か、あまりに、御みのなさげ、うれしくて、そのをんの、おくらばやとをもち、これまで、まいりて仆なり
(室町末絵巻)

女は昨日浦島に釣られた亀であり、浦島が連れてこられた場所は竜宮城なのである。

この時、浦島が女を送らなければ、竜宮城には辿り着けなかった。

また、亀を助けなければ、当然竜宮城にも行けなかった。つまり浦島は人情によって仙都への道を手に入れたのである。これは『風土記』との大きな違いである。

この違いは英雄視されている人物の違いにもよると思われる。

『風土記』では風流に英雄性を、室町の時代では人情に英雄性を見出しているのではないだろうか。「平安」時代、「風流」といえば連想されるのは貴族である。「室町」時代、「人情」とあれば武士である。室町へと時代が変わり、武士が中心となった世の中で影響を受けたのが、室町時代の浦島物語なのではないだろうか。

しかし『風土記』と同じように、浦島は神仙性を完全に自分のものにすることはできない。

た、ふるさとへ、かへり申たきとて、うちふし、なきあたるま、
れうけんなく
(室町末絵巻)

室町末絵巻では、浦島は人情で仙都までやって来た流れがあった。おそらくそれ故であろう、浦島は父母に何も告げずに来たことが心残りだと言う。一度故郷へ帰る理由として、父母に暇ごいをしたいというのは妥当であろう。

浦島が故郷へ帰る際、やはり女は箱を浦島に渡す。開けてはならないと言うが、その理由は告げられない。しかし、人情に厚い浦島はその約束を違えてはならない。約束を違えるという行為は、浦島の神仙性を失うことにつながるのである。

結局浦島は故郷では既に七百年の月日が流れていることを知り、昔家があった場所で箱を開けてしまった。ただ一度の過ちで浦島は神仙性を失ってしまったのである。

けれども物語は悲劇では終わらない。古絵巻、室町末絵巻ともで

ある。

七百ねんのよはひなれば、にんけんにあらずとて、うらしまのみやうしんと、いわひ、きせんくんしゆして、まいりけり

(古絵巻)

その、ち、うらしまは、つるにむまれ、かめに、たはむらをなしあさゆふ、あそひたはむれ、たまひける

(室町末絵巻)

『風土記』では完全に神仙性は消滅した。しかし古絵巻では理由は「七百ねんのよはひなれば、にんけんにあらずとて」と、別の形で神仙性を完全に回復するのである。また室町末絵巻では鶴に生まれ変わり、亀とたわむれる。この亀は舟に乗ってきた女に違いない。浦島は生まれ変わって神仙性を手に入れたのである。この「生まれ変わり」の思想に、来世に幸福を見る、来世的思想が窺える。

身分秩序が緩やかになり、下剋上が可能となった室町時代の時代性が御伽草子に色濃く反映しているのは確かである。人間から神仙性を手に入れ、また人間に戻り、完全なる神仙性を手に入れる。この「太郎」の英雄性は、下剋上で地位を手に入れていく武士達の姿と重なる。軍記物や、室町時代を反映したと言われる「ものごさ太郎」がある事などから、下剋上そのものが英雄視の対象であったのかも知れない。

貴族の社会から武士の社会へ、その移り変わりと共に英雄性も変化していると言えるであろう。

・候字と卍字は原本に従って区別したのもあるが、どちらかといえば、卍字を多用した。

(室町時代物語大成 例言より)

・「古絵巻」とは、宇良神社蔵「浦島神絵巻」について古い「うらしま古絵巻」のことである。また「室町末絵巻」は「古絵巻」について古い絵巻である。

補足二

鎌倉末から室町前期、惣領家に対する庶子家の自立により、それぞれの庶子家の長を中心とする「家」の結合が強まった。惣領は「一族」の長から「家」の長となった。相続も嫡子単独相続となる。この期の制度は近世、庶民の間にも広まった。「家」の存続維持を第一として「家」を何物よりも優先させる方向となる。同時に由緒ある家柄、家格を重視し、家名に恥じない生活が家長や家族に要求された。家長は「家」を守り、維持する責任者として先祖を祀り、親に仕え、家族の生活を守ると共に、強い権限を持ったのである。家族制の変化で長男「太郎」がその地位を浮上させてきた。その全盛期が近世となるであろう。いずれ家長となる「太郎」に英雄性が増してきた。そして「家」の代表となった長男「太郎」は、男子の代表となっていたのではないだろうか。

第三節 近世・御伽草子・浦島太郎

近世に入り、「浦島太郎」は「御伽草子」の中の一つの物語として版行された。それは遅くとも江戸中期までに他二十三編と共に版行されている。そして「御伽草子」が発行される際、「浦島太郎」も近世風なものへと変化しているのである。

昔、丹後国に浦島といふ者侍りに、その子に浦島太郎と申し、歳の齡二十四五の男ありけり。

(日本古典文学全集36 小学館)

「浦島」が名字になり、浦島太郎はその浦島家の息子となつてゐる。この他は、あまり室町時代のものとなつて展開となる。浦島の職は漁師であり、釣つた亀を助ける。女が小船に乗つて現れて、浦島を竜宮城へ連れていく。ただ、女が浦島を竜宮城に連れてきた際、自らが亀であることは名乗らなかつた。これはおそらく、亀の恩であることを知らせる時をずらした、意図的な技法である。女の正体を明かすのを先送りすることで、何故浦島が竜宮城に来ることができたか、ということ強調したのである。そうになると、亀だということ明かさなのまま恩を返さなければならなくなる。(この恩というのは、浦島の神仙性の獲得、不老不死の獲得である)

さて、女房の申しけるは、「一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むことも、みなこれ他生の縁ぞかし。ましてや、はるかの波路を、はるばると送らせ給ふこと、ひとへに他生の縁なれば、何かは苦しかるべき、わらはと夫婦の契りをもなし給ひて、同じ所に明暮し候はんや

女は浦島をひきとめるために、これは前世からの縁であるから、と言つてゐる。この辺りの部分が少し違うが、浦島が「人情」によつて神仙性を得たことは変わりがない。

「人情」によつて神仙性を手に入れた浦島は、その「人情」により帰郷を望む。室町末絵巻と同じ展開である。浦島は開けてはいない箱を渡されて帰郷する。しかし、やはり故郷は七百年経つてゐる。昔の家跡へ行き、箱を開けてしまふ。

この浦島が年を、亀がはからひとして、箱の中にたたみ入れにけり。さてこそ、七百年の齡を保ちける。

箱の中には浦島が経るはずであつた年月が入つてゐた。箱を開けてしまつた浦島は変わり果て、鶴へと変化する。

ここまでは下剋上を英雄視してきた室町時代の「浦島太郎」と似たようなものである。しかし、『御伽草子』では浦島の他に「桃太郎」や「金太郎」といった力を備えた英雄「太郎」も存在しているが、それらにも共通する特徴として、教訓性が強いということが挙げられる。近世の浦島太郎は「人情」を教訓化しているといえるのである。

生あるもの、いづれも情けを知らぬといふことなし。いはんや、人間の身として、恩を見て恩を知らぬは、木石に譬えたり。

命あるものは、どれも情けを知らないということはない、まして、人間の身として、恩をうけて恩を知らないのは、木や石にたとえられてゐるといふ。この時重要視されているのは、漁師であつた浦島が神仙性を手に入れたことではなく、それに至つた経過である。助けた亀が返す恩、それによる浦島の神仙性の獲得、「情けは人のためならず」的な雰囲気を漂わせてゐる。

この時、浦島が犯した禁忌については触れられてゐない。「恩」を重要視する以上、浦島が約束を違へた事実はあまり追及してはならないのである。禁忌を犯したその後、浦島を鶴に変化させて、亀(女)との再会を果たし、浦島の明神として完全な神仙性を得たことを描くことで、禁忌を犯したことがむしろ好転したように見える。そして、情けのある者は、過ちを犯しても救いがあるという雰囲気を作り上げてゐるのである。

ただ人には情けあれ、情けのある人は、行く未めでたきよし申し伝えたり。

とあるように、浦島の「人情」が強調され、英雄「太郎」は成功をおさめる。「浦島太郎」は悲劇の英雄だと思われているが、少なくとも江戸中期頃は、浦島太郎は「人情」により神仙性を手に入れた英雄だった。そしてその英雄性は、教訓性を帯びて更に強化されているのである。

・この節の引用は『日本古典文学全集36 御伽草子集』（小学館）による。

第四節 近代・森鷗外・玉篋兩浦嶋

鷗外は「浦島太郎」を下敷きにして「玉篋兩浦嶋（たまくしげふたりうらしま）」を書いている。これは演劇用の脚本だが、鷗外の新しい浦島の解釈も加わっているのである。

「玉篋兩浦嶋」は乙姫との別離の場面から始まる。何の不自由もない平和な生活の中で浦島は自分の人間性を実感した。

おとこは自然、われは人、

おとこは物の おのづから

成る をよろこび、われはまた、

ことさらに事を 爲さんとすれば、

ふたりのころは 合ひがたし。

乙姫は自然にあるがままを受けとめ、浦島は何事かを為したいと思う。浦島は志を持ち、地上へと帰っていく。その地上は戦国の世

となっており、浦島は海を警護していた武士達に咎められ、玉手箱を引き合ううち、箱は開き、浦島は老人となってしまう。これは、どうしようもなく寂しくて、玉手箱に救いを求めたわけではないので、現在多くとられる「つまらないことをした」という解釈はできない。浦島は不可抗力で玉手箱を開け、本来の年齢となったのである。そのため、武士となっている浦島の子孫との対比が明確になったと言えるだろう。

浦島は竜宮で「われはまたことさらに事を爲さんとすれば」と言っていた。志を持つて地上に上り、その気が早いうちから碎け、玉手箱に救いを求めれば、おそらく初志を貫けなかつた愚者にされてしまっだろう。しかし浦島は不可抗力で老人になる。事を爲そうとしてもできない。浦島に残されている物は、乙姫が別れの際に流した涙の玉のみなのである。

そして浦島の子孫である「後ノ浦島太郎」はどうか。後ノ太郎は遠い土地まで攻め入り、名を轟かせたいという。

わが父なりし 浦島らの

とほさえみしを うちしより、

平安城の みよさかえ、

みつぎするもの 歸化するもの

ひきもきらねど、ものものふの

ころは鑿かず、ひのものとの

武名をなほも あげんため、

わたつみこえて とほつくにへ

わたらんとこそ おもひ候へ。

この志は、浦島が竜宮を出た理由と同じである。後ノ太郎は、金

銀について疎い者ばかりなので、その類の蓄えが欠けていた。浦島は事を為そうとする後ノ太郎に玉を渡す。

おもふは先祖。

行ふは

子孫にこそあれ。

鵜外は人の世にも不老不死があると解釈した。それが、浦島と後ノ太郎との関係である。

事業をわかき わがすゑに

つたへおこなふ ことをうる、

これもひとつの 不老不死。

神仙的な不老不死は得損ねたが、人間としての不老不死を手に入れた、ということだろう。鵜外の「玉篋兩浦嶋」の結末は、決して不幸ではないのである。

また、昭和二十年、書き下し創作集として『お伽草子』という作品集が出版された。著者は太宰治である。その中に、『浦島太郎』のパロディの「浦島さん」という作品がある。

太宰の「浦島さん」は浦島の生地の話から始まる。丹後の水の江、京都の北部、今でも京都の北海岸に浦島を祀った神社があるという。しかし太宰の書き方は「太郎をまつた神社があるとかいう話を聞いた事がある」とある。既にこの時代には浦島が人格化される部分が抜け落ちているようで、そのために但し書きのように説明が入っているのであろう。近世までの浦島物語では特に家族構成にはこだわっていないが、太宰の浦島は旧家の長男という設定である。

旧家の長男というものには、昔も今も一貫した或る特徴がある

ようだ。趣味性、すなわち、之である。善く言えば、風流。悪く言えば、道楽。

この道楽は放蕩とは違う。放蕩は次男、三男に多く、長男にはそんな野蠻性はない。先祖伝来の恒産があるから、恒心も生まれて、道楽といつても片手間遊びなのだという。家の全てを引き継ぐはずの長男に、醜聞は許されない。また、次男、三男のように生まれてからの差を妬み、自棄になることもない。それでは、その長男「太郎」から、どの様な人物像が見えるだろうか。

浦島に対して、妹、弟が無遠慮な批評をしている。冒険心がないからいけない、ケチである、男振りがよすぎる。これに対して浦島は「何の事やら、わけのわからんような事を悟り澄ましたみみたいな口調」で言う。弟妹の様子から、長男「太郎」は決して尊敬の対象ではないようである。無論、全ての財産をその手にする人物、そのように扱われる人物に対しての妬みからもあるだろう。しかし、その立場に慢心している「太郎」がいるのである。その態度も弟妹の反感を買うだろう。

遊びに依つて、旧家の長男にふさわしいゆかしさを人に認めてもらい、みずからもその生活の品位にうつとりする事が出来たら、それでもうすべて満足なのである。

長男「太郎」は何でもできる英雄ではない。将来を約束された立場の、ただの人間である。太宰の浦島の表現には「太郎」を正当化する言葉は一言もない。旧家の長男「太郎」は後継者としての権威を持ちつつも、次第にそれは薄れ始め、無条件の英雄の地位から退きつつあると言えるだろう。

風流人の様に海岸を逍遥していた浦島は、亀に呼び止められた。

子供になぶられていた所を浦島に買い取られた亀である。恩返しをしたくて毎日待っていたという亀に対し、太郎は浅慮、無謀であると言う。会いたかったのだから仕様が、心意気を買えという亀に、身勝手だと呟く。

「なあんだ、若旦那。自家懂着していますぜ。さつきご自分で批評がきらいだなんておっしゃってた癖に、ご自分では、私の事を浅慮だの無謀だの、こんどは身勝手だの、さかんに批評してやがるじゃないか。若旦那こそ身勝手だ。私には私の生きる流儀があるんですからね。ちつとは、みとめて下さいよ。」

亀は浦島の弟妹とは違い、人間社会に属さない者である。それ故、浦島に対しての言葉に容赦がない。この亀の言葉で、浦島の長男としての威光、自信は崩れていく。それを守るため、浦島はその立場を振りかざすのである。

「どうも、われとわが身に伝統の誇りを自覚してない奴は、好き勝手な事を言うものだ。一種のヤケと言ってよかろう。私には何でもよくわかつているのだ。私の口から言うべき事では無いがお前たちの宿命と私の宿命には、たいへんな階級の差がある。生れた時から、もう違っているのだ。私のせいではない。それは天から与えられたものだ。」

この浦島言葉こそが、近世の時代から作られた長男の認識ではないだろうか。長男とその他の弟妹との宿命には、大きな違いがある。それこそは天から与えられたものである。故に長男「太郎」は何でもわかる、何でもできる英雄として君臨しなければならないのである。

しかし、長男に与えられた権限、特権とは、実は天から与えられたものではなく、人の手によって与えられたものである。時代を遡れば、財産は兄弟全員に分与され、女にもその権利が与えられていたのだ。だから、長男を特別視する目を持っていない、別世界からやって来た亀に、簡単にその地位から引きずり降ろされてしまう。

亀は素直に、正直に「太郎」の慢心を砕く。浦島が竜宮へ行く事は、別世界の法則の中へ飛び込むのと同じ事である。そうなるで一層、浦島の中の常識は覆される。龍宮に行く事で浦島は本来の姿、人間の本性を出し、長男「太郎」の慢心が消えていくのである。

浦島が本性を出せた竜宮はどの様な所か。艶やかではなく、騒がしくもなく、何をしても許される場所である。

近世以前の竜宮城は神仙境であった。報恩により、浦島は神仙の地に入ることを許されていた。しかし太宰の「浦島さん」では竜宮を神の国として触れている所は、浦島の知識だけである。亀の言葉で言えば、竜宮は「歌と舞いと美食と酒の国」だ。亀の言う通り、浦島の竜宮での暮らしは、好きな時に飲み、食べたい時に食べ、魚の舞うように泳ぐ様子を見、乙姫の誰に聞かせると言うものでもない琴の音を聞く。誰も咎めず、批評もなく、無限に許されている。この竜宮は神仙の国と言うよりも、人間の理想郷と言えるのではないだろうか。

そして浦島は地上へと帰る。その理由は両親が気になるのではなく、無限に許される生活に飽きたからである。それも人間の特徴だと言えらる。長男「太郎」はただの人間となり、もう無条件の英雄とはなり得ないのである。

太宰の浦島も、地上へ帰り、玉手箱を開けてしまう。何故、浦島

は三百歳の老人になってしまったのか。これについて太宰は新しい解釈を加えている。

先入観に捕われて、浦島を不幸だと見るが実はそうではなく、年をとることで、また無限の許しを得たのではないかと太宰はしている。一般的な解釈は「だからあけなきよかつたのに、つまらないことをした」だが、これは年をとってしまいう事が不幸であるという先入観からの解釈である。

年月は、人間の救いである。

忘却は、人間の救いである。

浦島は地上に帰ってからも無限に許されていた。玉手箱を開けなければ三百歳の年はとらない。浦島は寂しくて、どうしようもなく、玉手箱に救いを求めた。忘却という救いも、浦島の気分委ねられていたのである。

そして結語は「浦島は、それから十年、幸福な老人として生きたという」とある。

太宰、鷗外の両浦島は、神仙性を失いかけた浦島の弁護の役割を果たしていると言えないだろうか。「つまらないことになった」と思われている浦島の名誉の回復である。しかも、中世や近世と違い、完全に神仙性を手に入れるのではなく、人間としての幸福を手に入れる。その上で、浦島を祀った神社の存在や、いずれ、神仙性を手に入れるのではないだろうかという余韻を伺わせる。

太宰の「浦島さん」は、神仙譚というよりはむしろ、浦島が別世界に触れて、自分という人間や、人間社会を客観的に見ている物語といえるだろう。竜宮からの帰郷も、望郷というよりは、別世界に触れて、自分の人間性を深く知ったようだった。無限に許されてい

ても、浦島は決して乙姫ようにはなれないのである。浦島本人も「ああ、いつまでも、あそここいたほうがよかった。しかし、私は陸上の人間だ。どんなに安楽な暮しをしても、自分の家が、自分の里が、自分の頭の片隅にこびりついて離れぬ」と言っている。

近世までの浦島は神仙譚もあり、また模範的人物としても描かれていて、人間性よりは人間から神となる神仙性に重点が置かれている。「太郎」は英雄的人物として描かれているのである。しかし近代では「太郎」が必ずしも英雄ではない。

太宰の「浦島さん」では英雄どころか、旧家の長男の特徴を持って、亀にやりこめられ、鷗外の「玉篋兩浦喚」では、全てを手に入れることができる英雄「太郎」ではないのである。

別世界で自らの人間性を実感する。最後に得るのは人間としての幸福、それは人間としての不老不死でもあり、忘却でもある。近代で「太郎」は、人間として描かれている。浦島から神仙性が離れつつあるのと同時に、「太郎」からも英雄性が離れつつあると言えるだろう。

第五節 浦島物語の変遷

『風土記』の浦島は、色好みな雰囲気を持っており、風流で「蓬山」への道を手に入れた。しかし結末は神仙性の消滅であった。色好み、室町時代の絵巻とは違い、明神となっていない事などから、『風土記』の浦島物語の視点は神仙性ではなく、神女に向けられるべきであろう。『風土記』の浦島物語は恋物語の性格が強いのである。神女と二度と会えない事を悟った浦島は歌を詠む。

常世とこよべに 雲たちわたる

水の江の 浦嶋うらしまの子が

言持こともちちわたる

(風土記逸文 丹後國)

「トコヨ(神仙境)の方に向かつて雲が立ちわたっている。水の江の浦嶋子の神女への言葉(歌)を持ち運び伝える雲がたちわたっている」の意である。これに対して神女が歌を詠む。

大和おほべに 月吹きあげて

雲放ばなれ 退きき居りともよ

吾わを忘わすらすな

「大和の国の方へ風が吹いて雲が切れ切れに離れる——そのように貴男と離れていまして、わたしを忘れないで下さい」

浦島もまた歌を詠む。

子こらに戀こひ 朝戸あさとを開ひき

吾わが居あれば 常世とこよの濱はまの

波なみの音聞なまこゆ

「神女を恋い慕って独り寝した夜があけて、朝、我家の戸を開けてながめやっていると、常世(神仙境)の浜辺の音が聞こえてくる」という意である。この歌の内容も、贈答という形も、恋物語的である。また、最終部分の後の世の人の歌の中には「玉匣たまぐはひ 開あけずありせば またも會あはましを」という神女に「逢えない」という事のみが強調されている一文がある。浦島が手に入れた神仙性は、神女と結ばれる事に付随するものである。「風土記」においては浦島物語は恋物語だったのである。

室町時代に入ると、浦島物語の視点が報恩へと変わる。恋物語から報恩譚への変化は社会の変化とも関係していると言えるだろう。

最終部分の展開の違いも、そこにあるのではないだろうか。人情を重視して、上へ登りつめることを英雄視しているのなら、悲劇では終われないのである。

近世に入って、人情は更に強調された。人情を持つことが良い事だとされたのである。人情に視点を置き、約束を違えた事はあまり追求しない。結果より経過を見るのである。浦島は鶴となり、明神となる。ここで「太郎」の英雄性は強化されているのである。

そして近代、浦島物語は更に推蔽された。人情と、約束を違える禁忌が同居するようになったのである。おそらく、人情を強調するために亀と女を別物にし、早くに恩返しの話を切り出させ、禁忌を強調するために、最終部分の幸福的結末は削除されたのである。同時に「太郎」の英雄性は消えていき、浦島物語に教訓性のみが残ったのである。

「太郎」像には、英雄であった時代、そうではなかった時代、英雄性を失った時代とがある。それは英雄視される人物像の変化によるものではないだろうか。第二章では英雄視される人物と「太郎」との関係を考えてみたい。

第二章 「太郎」と英雄性

第一節 色好みと「太郎」

中古の時代の「太郎」は長男を意味する。「源氏物語」にも「太郎」の用例が四例ある。

たーらう「太郎(名)長男の稱。

①夕霧に同じ。少女二、一三六、三 ②藤中納言(1)に同じ。眞

木柱二、四〇七、七 ③衛門ノ督③に同じかるべし。若菜二三
三一七・夕霧三、二八六、一一二 (源氏物語辭典)

この中の夕霧について。夕霧というのは本文に出てくるわけでは
ない。通称である。

コノ人ノ歌ニ、山里ノアハレヲ添フル夕霧ニ立出アテム空モナ
キ心シテトアリ、且ハ夕霧ノ卷ガ、コノ人ノ事ヲ主トセルニヨ
リ、カク名ツケタルナルベシ (源氏物語辭典)

彼の異称は「冠者の君」「大学の君」「侍従」「中将」「源中将」
「宰相ノ中将」「宰相」「権中納言」「中納言」「大将」「右大臣」「左
ノ大将」「大臣」「右ノ大臣」「左ノ大殿」「大殿」「左ノ大臣」「左大
臣」である。

夕霧を指す言葉は官位である。これは夕霧のみに限られたことで
はない。故に、中古の時代、官位が重要視されていると見ることが
できる。

ところで、夕霧の異称の中に「太郎」が含まれていない。異称は
『源氏物語辭典』を参考にしているが、それらの中に「太郎」は含
まれていなかった。ならば「太郎」はどのように使われているのだ
ろうか。

式部の司の試みの題をなすらへて、御題賜ふ。大殿の太郎君の
試み賜はりたまふべきゆゑなめり。 (源氏物語 少女)

「大殿」というのは源氏のことである。「太郎(君)」は長男を表
し、「大殿(源氏)」の太郎君(「長男」ということになる。

長男を表すのみの「太郎」は夕霧だけではない。

童なる八郎君は、むかひ腹にて、いみじうかしづきたまふが、
いとうつくしうて、大将殿の太郎君と立ち並びたるを、

(源氏物語 真木柱)

「大将殿」というのは髭黒のことで、「太郎君」は髭黒の長男、
藤中納言のことである。また、夕霧の長男、衛門の督も同様である。

今日の拍子合はせには童べを召さむとて右の大殿の三郎、尚侍
の君の御腹の兄君、笙の笛、左大将の御太郎、横笛と吹かせて、
簀子にさぶらはせたまふ。 (源氏物語 若菜 下)

この御腹には、太郎君、三郎君、五郎君、六郎君、中の君、四
の君、五の君とおはす。内侍は、大君、三の君、六の君、二郎
君、四郎君とぞおはしける。 (源氏物語 夕霧)

このように、長男が「太郎」であり、次男が「次郎」、三男は
「三郎」と、このまま続く。「太郎」は英雄ではない。英雄であるの
は「冠者の君」「藤中納言」「衛門の督」なのである。

また伊勢物語六段にも「太郎」が現れる。

得られそうになかった女を男が盗む。その夜、夜も更け、雷が鳴
り、雨も激しく降るので男は女を小屋に置く。女の悲鳴も聞こえず、
夜が明けて小屋の中を見ると、女は鬼に食われて姿がない。

盗みて負ひて出でたりけるを、御せうと堀河の大臣、太郎国経
の大納言、まだ下臈にて内へまゐり給ふに(伊勢物語 六段)

女は兄弟の手で助けられていた。「堀河の大臣」とは藤原長良の
三男、基経のこと、「太郎国経の大納言」というのは長良の長男国
経のことである。国経は長男であるが、基経の後に名がある。

「昭宣公(基経)は弟なれ共、忠仁公の御養子なれば」(闕疑
抄)「氏長者になつた弟の基経を先に書いたので、特に『太郎』
とことわつたのであろう。」(新版)

(伊勢物語全評釈 竹岡正夫著)

良房の養子となった基経は氏長者になったことで、国経よりも官位が上になったのである。このように「太郎」は重視されていない。英雄性は他の点に見出される。

『風土記』の浦島は漁師ではなかった。

早部首等が先祖の名を筒川の嶋子と云ひき。爲人、姿容秀美しく、風流なること類なかりき。斯は謂はゆる水の江の浦嶋の子といふ者なり。

(風土記逸文 丹後國)

浦島は高貴な出である。また、容姿端麗で風流人であった。独りに舟を浮かべること、これもまた神女の指摘するように風流なのである。家柄が高貴であること、風流人であること、これらは「色好み」を彷彿させる。

「色好み」の代表的な条件に、官位に優れていること、歌に優れていること、女にまめであることなどが挙げられる。英雄が「色好み」であるならば、物語は恋物語となっていく。その時、「太郎」は重要視されない。

中古の時代の英雄は「太郎」ではなく「色好み」だったのである。

第二節 「太郎」の英雄性

中世の時代、公家・幕府・守護代名などが権威を失って家臣がそれにかわり、また農民が支配者層に立ち向かうなど、これまで下層にあった者が実力によって上層の者をしのぐ風潮が一般的になった。この下剋上の時代を反映して、「お伽草子」には地方出身の者が登場する。「ものくさ太郎」もその一つである。

空腹時にもちを五つもらい、四つまで食べる。残り一つで遊んで

いるうちにそれは太郎の手を離れ、転がついていく。しかし太郎は動かず、誰かが通るのを待った。

このように物くさ太郎は物くさであることが強調されている。その後、長夫（長期間にわたる夫役）という労役を押しつけられ、都人を妻にすれば分別がついて自分のためになると言われて上京した。

これを境に太郎はまめになる。二条大納言の屋敷で「これほどにまめなる物あらじ」と言われて三ヶ月の長夫を七ヶ月勤める。

妻を求めるとき、路上で婦女を捕まえて妻にする辻取りは天下御免とだまされる。捕まえた女は太郎に謎かけをする。太郎はそれを解き、また返歌もする。

物くさからまめになる滑稽さを描いたものもあるが、一庶民の出世の様子は下剋上の時代である。

中世の時代には軍記物が登場する。歴史上の事実をもとにした物語なので、下剋上の時代の流れを汲んでいるのである。

このような時代の風潮の中で、浦島物語は武士の人情と下剋上の英雄性を備えるようになったとすると、下剋上に対して英雄視がなされていたと考えることができるのではないだろうか。

また、中世の作品には「本地物」といって、神仏の化身としての人間時代の話を語るものが多い。浦島物語が女の獲得から、神仙性の獲得に変わり、結末が神仙性の獲得となるのもそれによる。恋物語よりも人情、本地物へと物語は移り変わった。同時に英雄性も移り変わったのである。

英雄性を備えた「太郎」が登場したのもこの時期だが、同時に一方で、英雄ではない「太郎」も出現している。

「物くさ」と「まめ」には「のさ」の精神が一貫して内在するとする説（佐竹昭広『下剋上の文学』）がある。「のさばる」の「のさ」という中世語に、消極的には緊張のゆるみ、積極的には横着な気持ちの二面あり、これが物くさ太郎の行動原理で、彼は、狂言の中に登場する幾人かの太郎冠者にも共通して「中世的人間の一つのタイプ」であると、高く評価する。

（『日本の古典 — 名著への招待 —」

北原保雄 編 大修館書店

中世的人間のタイプに「のさ」がある。その特徴を備える「太郎」も存在する。太郎冠者に何故「太郎」の名が与えられたのか、順序を表すのみの「太郎」なのだろうか。その「太郎」に「のさ」の性格が与えられているということは、「太郎」が完全な英雄性を手に入っていないことだろう。

「太郎」は人情、神仙性で英雄性を備えながらも一方で「のさ」の性格を持つという、二面性をもっている。「太郎」の英雄性は表われたものの、それは完全なものではなかったのである。

第三節 英雄「太郎」

江戸時代には教訓性を帯び、「太郎」は英雄性を増していく。「浦島太郎」は悲劇の英雄とはならなかった。『御伽草子』では大団円で終わる作品がほとんどである。英雄性はここで強化された。

「桃太郎」は江戸時代中期以後、型をととのえ、赤本などで知られ、五大お伽話の一つとして流布したものである。「桃太郎」は英雄「太郎」として代表的だが、「浦島太郎」「ものくさ太郎」との共

通点は「太郎」である。これに「力太郎」「金太郎」などが加わると、共通点は狭まる。「太郎」という名の英雄物語であるが、何故「太郎」が英雄となり得たのだろうか。

中古の時代、「太郎」は長男を表した。それはこの時代でも変わっていないだろう。長男「太郎」が英雄性を帯びたのは、長男が英雄視された結果なのである。

この時代、身分制度による社会秩序を維持するために「家」の存続が重視され、家長の地位や権限が絶対視された。その「家」を継ぐのは長男「太郎」である。長子単独相続が重んじられ、「太郎」の地位は上がった。「太郎」が英雄視されたのは長男の地位の上昇による結果である。長男「太郎」を英雄視することで、長男を重視させようとしたのであろう。これにより「太郎」は完全なる英雄性を手に入れたのである。

一方で、氾濫する長男重視に対して反発もあつただろうと思う。英雄となった長男「太郎」は男性の代表となったと同時に、代表的なもの、代名詞、良くないことの隠語などにも「太郎」が用いられる。べてんにかける、詐欺行為でだますことを「太郎に懸ける」と言ったことなどがそれである。

戦後発行された「桃太郎」の絵本は民主主義の先駆とされる話が多く見受けられるが、戦時中には「国民性と国民精神の伝統が脈々として流れ、日本一の誇りを黍団子に象徴し、孝行、正義、仁恕、尚武、明朗、進取など、修身の徳を具体化した小国民童話」で「不和の犬・猿二動物を、主将の下に協力一心ならしめたところに深い意義を持つ、わが国民性と国民精神とを結晶せしめた小国民文学」とされていた。「太郎」の英雄性は軍国主義に利用された。しかし

英雄性があることには変わりがない。軍国主義の世の中での英雄と英雄「太郎」、しかも敵に打ち勝つ「太郎」が重なったのである。

大正十三年の芥川龍之介の作品では、桃太郎は老人夫婦が愛想をつかした怠け者の腕白者で、飢えた犬、欲の深い猿、地震学にも通じた雉子などをつれて鬼ヶ島に行き、罪のない鬼に建国以来の恐怖を与えたことになっている。これは軍国主義による「桃太郎」利用の反発、軍国主義そのものへの反発だと思われる。

そして戦後、「太郎」は英雄視から外れた。誰もが同じ様に権利が与えられ、また同じように、英雄となれる機会が与えられたのである。こうして「太郎」から英雄性が離れていった。

おわりに

現代の「太郎」

近世の長子単独相続、戦時中の軍国主義で「太郎」の英雄性は強化された。その英雄性が離れるきっかけとなったのが終戦であろう。長子単独相続ではなくなり、「太郎」が英雄である必要がなくなつた。そして英雄視の対象も変わっていったのである。

民主主義の世の中になり、英雄となる可能性は誰にでも与えられた。英雄視される人物、物語の主人公は特別な人間ではなくなったのである。英雄性は「太郎」から離れた。「太郎」でない英雄が現れ始めるのである。「桃太郎」は戦後、民主主義の先駆として描かれた。しかし「桃太郎」は特殊な生まれ方をした特別な人間である。特別な人間が他の人間よりも秀でるのは当然だといえるだろう。現代の英雄性は大勢の中から秀でることが必要なものである。かつての

長男「太郎」は「家」を継ぐことが決まっていた特別な人間であった。その英雄性は現代では通用しないのである。

ただ、特別な人間で英雄となった「太郎」がいる。正確には「タロウ」であるが現代の英雄「ウルトラマンタロウ」が存在しているのである。タロウは人間ではなく、他の惑星からやってきた異星人だが、人間の姿の時は、やはり大勢の中の一人である。

同じような英雄に、「仮面ライダー」も存在する。一番新しいシリーズ「仮面ライダーブラックRX」の主人公の名は「南 光太郎」なのである。

しかし、両方に共通するのは「太郎」が必ずしも英雄というわけではないということであろう。英雄であるのは「ウルトラマン」であり、「タロウ」ではない。しかも、ウルトラ兄弟の中でタロウは六男なのである。本来の長男「太郎」からは離れ、固有名詞として使われているのである。「RX」も同様で、「南 光太郎」は英雄ではない。「仮面ライダー」が英雄である。

新しい英雄には新たな、そして自由な名が与えられた。「太郎」の英雄性は失脚したのである。

現在の「太郎」のイメージと言うと、あまり良いものではない。藤子不二雄原作の短編が小説化された「ひとりぼっちの宇宙戦争」では、主人公の名は「鈴木太郎」であるが、あまり英雄的ではない。原作の設定では、とりたてて頭がいいというわけでもなく、また体力に秀でているわけでもない主人公が地球の代表として、知力、体力、外見もそっくりなロボットと戦う。地球の代表の選出の仕方は「まったくでたらめに」である。知力も優れておらず、また体力も人並。平凡な人物であることを強調しているようである。「鈴木太

「太郎」の名も、設定からきたのだろう。「鈴木」という苗字は、日本で多い苗字の一つである。際立った名を用いない所に、平凡さや世間一般といった印象を受ける。「太郎」も同様で、選ばれた英雄というより、平均的な、大勢の中の一人といった印象である。

「太郎」は英雄ではなく、平凡なのである。

曾野綾子著の「太郎物語」の主人公も「太郎」と名付けられている。「太郎」少年は、自分の名前に対して良い印象を持っていない。理由の一つは「太郎」が幼名であること。そしてもう一つは、父親の命名の好みの中に、平均的日本人になってほしいという望みが感じられるためである。このように、「太郎」は英雄ではなくなっ

てしまった。

「太郎」は平均的日本人をイメージさせる。「浦島太郎」は英雄性を失くし、教訓性のみを残した。他の「太郎」の物語もおそらくこれに続いただろう。教訓性を残した「太郎」は日本人のあるべき姿となったのではないだろうか。「人情」は当然、持つべきものである。特別な人間ではなく、誰もが、そうあるべきなのだ。あるべき姿の代表として、「浦島太郎」は存在する。約束を違える禁忌もそうであるし、勧善懲悪をテーマとする「桃太郎」もそうであろう。日本人として、当然持つべき道德の代表、それが転じて日本人の代表となったのではないだろうか。誰にも教訓を教えるのならば、特別な英雄であってはならない。英雄性の喪失も理由がつく。そして「太郎」は人間に戻った。英雄性を取り除けば、長男「太郎」が残る。

家族の中の子供の一人、現在の「太郎」は、家庭の中に身を置いているといえるだろう。英雄性を失った「太郎」が、男子の代表と

されるのは、第一に、長男「太郎」の要素を残しているからである。近い過去の長子相続のイメージは現在も残っている。社会の最小単位「家族」の後継長男「太郎」、それが平均的日本人の家族の姿であるのだから、長男「太郎」が男子の代表とされるのも当然であろう。長男「太郎」を持つ「家」を平均的と見るのは、「太郎」物語が多く語られていた近世からの名残りからである。

第二に、「太郎」が善きにつけ悪しきにつけ、多く氾濫したためでもあると思われる。「御伽草子」では「太郎」が多く登場し、物語や小説などにも、当時の風習そのままに「太郎」の名を与えられた長男もいる。また、「太郎」重視の反発の「太郎」の使われ方もあったであろう。「太郎」は多く存在し過ぎたのである。そして多数いる者を代表とした。それが平均的日本人の代表「太郎」である。

「太郎」は多く存在する。英雄性を帯びているならまだしも、現在の「太郎」のイメージは、どうしても、同じ「太郎」の中に埋没した、無個性、一般的平均的日本人となってしまう。現在でも「桃太郎」や「金太郎」といったような英雄「太郎」の物語が残っているが、今では教訓性が重視されているため、英雄というよりはむしろ模範的人物といった方が合っている。また、現在のイメージの「太郎」を念頭に置いて彼らを見ても、英雄、という見方ができなくなっているのかもしれない。

過去、英雄の条件が「太郎」であることであつたのに対し、現在無条件に英雄になれる人物は、地球外生命体、もしくは科学的に卓越した能力を持っている者、授けられた者であろう。具体的に例を挙げると、宇宙からやってきた正義の味方、超能力者、宇宙からやってきた人物から超越した能力を授かった者、科学的研究の上で開発

された能力を授かった者、等である。その点から見れば「桃太郎」はかろうじて、現在の英雄性と同調している部分があるだろう。

英雄の条件は「特定の人物」から「その人物の境遇」へと移行している。という事は、英雄性が移行してしまったという事である。

「太郎」は卓越した能力、しかもできるだけ超自然で、科学的な力を持たなければ、英雄に返り咲きはできない。それに成功したのは「ウルトラマンタロウ」のみである。しかし、「タロウ」は英雄の返り咲きに成功したが、「太郎」ではない。「太郎」の名を持ちつつも、それを片仮名にすることで、平均的日本人のイメージを取り払ったのである。「太郎」は英雄性の移行により英雄性を帯びていき、また英雄性を失っていった。現在の「太郎」のイメージも、英雄性を失った「太郎」の流れ着いた場所といえるだろう。

〈参考文献〉

日本の古典 — 名著への招待 — 北原保雄 編 大修館書店
日本の文学古典編38 お伽草子

源氏物語辞典 沢井耐三 校注・訳 ほるぷ出版
新潮日本古典集成 源氏物語三 北山谿太 平凡社

源氏物語四 石田穰二・清水好子 校注 新潮社
新潮日本古典集成 源氏物語四 石田穰二・清水好子 校注 新潮社

源氏物語五 石田穰二・清水好子 校注 新潮社
新潮日本古典集成 源氏物語五 石田穰二・清水好子 校注 新潮社

源氏物語六 石田穰二・清水好子 校注 新潮社
新潮日本古典集成 源氏物語六 石田穰二・清水好子 校注 新潮社

石田穰二・清水好子 校注 新潮社
伊勢物語に就きての研究(補遺篇・索引篇・圖録篇) 大津有一 編 有精堂

伊勢物語全評釈 古注釈十一種集成 竹岡正夫 著 右文書院
日本古典文学大系67 日本書紀 上

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注 岩波書店
日本古典文学大系2 風土記 秋本吉郎 校注 岩波書店

鑑賞日本古典文学第二卷 日本書紀・風土記
直木孝次郎・西宮一民・岡田精司 編 角川書店

日本国語大辞典 第三卷 日本大辞典刊行会 編集 小学館
日本伝記伝説大事典 乾克己・小池正胤・志村有弘・高橋貢・

鳥越文蔵 編著 角川書店
日本昔話事典 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・

三原幸久 編著 弘文堂
御伽草子の精神史 島内景二 著 べりかん社
室町時代物語大成 第二 角川書店

日本古典文学全集36 御伽草子集 大島建彦 校注・訳者 小学館

大幸治全集 第七卷 筑摩書房
故事・俗信・ことわざ大辞典 小学館

室町時代物語大成 補遺一 尾藤正英 監修 あすと出版

基礎徹底 日本史 三省堂 日本史(三訂版)

稲垣泰彦・甘粕健・鬼頭清明・黒田俊雄・
村井益男・佐々木潤之介・川村善二郎

太郎物語 — 高校編 —

曾野綾子著 新潮社

浦島子伝

重松明久著 現代思潮社

日本歴史民俗論集 3 家・親族の生活文化

吉川弘文館

講評

「太郎の物語の変遷」は、古代から現代にいたる「太郎」が登場する物語の変遷を俯瞰するという広大な構想にチャレンジしたユニークな論文である。江戸時代までの浦島物語の変遷については、既成の研究書があるが、その変遷の研究を現代大衆文化にまで及ぼして見せたところに、本論の新しさがあると言えよう。また、一つの言葉の変遷を、長い時間の間で追ってみるといふ試み自体は、現代の社会を相対化する上で、重要な視点を生み出すと思われる。

ただ、こういった言葉の研究の方法は、なかなか難しい。本論は、始め「太郎」に英雄性があつたが、時代が下るにつれて「英雄性」を失つたという流れで書かれている。一つの言葉が辿る方向性として一応納得できるものの、もう少し丹念に用例を拾いながらの研究が必要と思われる。それは、現代における太郎の用例についても言える。また、「太郎」の物語の変遷の原因として、家族制度の変遷が挙げられているが、これも、もつと多様なアプローチが必要と思われる。

(青木 美保)